

Title	ハイネとシェイクスピア : アングロフォビアとシェイクスピアロマニアの関係
Sub Title	Heine and Shakespeare : Heinrich Heine's Anglophobia and Shakespearemania
Author	宮下, 啓三(Miyashita, Keizo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1997
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.73, (1997. 12) ,p.539- 556
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	安藤伸介, 岩崎春雄両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00730001-0539">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00730001-0539</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ハイネとシェイクスピア

—アングロフォビアとシェイクスピアロマニアの関係—

宮下啓三

H. H.——近代ドイツ文学の歴史に登場する重要な人々のうちで、ハイネリヒ・ハイネとヘルマン・ヘッセが同じイニシアルを持っている。これは単なる偶然の一致でしかないのだが、両者の間に共通点がまったくないというわけでもない。ヘッセは小説『荒野の狼』の主人公にハリーの名をあたえた。20世紀の西欧文明社会に順応できなくて精神的な苦悩とたたかうアウトサイダーである主人公は、同じイニシアルを持つという単純な理由だけでなく、さまざまな裏付けから作者の分身であることは疑いようがない。ヘルマンというドイツ式の名を持つヘッセがあえてアングロサクソン風の名を分身にあたえたのは、アウトサイダーであることを暗示するためであったろう。そして、ヘッセが選んだ名を、およそ1世紀も前に、ハイネが遠ざけた。彼はハリーであることをやめて、ハイネリヒとなった。それは、アウトサイダーであることを宿命づけられていると感じつけてきたユダヤ人が、キリスト教社会で認知されるための手続きに似ていた。だが、ハリー・ハイネは、ハイネリヒ・ハイネになってからも、さながら1世紀後にヘッセが描いたようなアウトサイダーの立場を免れることができなかった。

ユダヤ人の子として1797年末に誕生したハリー・ハイネは、1825年にゲッティンゲン大学で法学を修了して学位を得た。その前の月にゲッティンゲンに近い町の教会で洗礼を受けてプロテスタント（新教徒）になった。キリスト教への改宗と同時に、名をハイネリヒとあらためた。学位取得と改宗は密接な関係を持っていた。学位を生かして公職に就くためには、改宗と改名が必要な条件と思われたからだった。しかし、皮肉にも、大学卒

業後に公職を得ることができなかつた上に、ユダヤ人たちからは背教者と思われ、キリスト教徒たちからは依然としてユダヤ人としてしか見てもらえず、アウトサイダーの立場から脱却するための方法が、逆にアウトサイダーの宿命の重みをいっそう加える結果となつた。

ハイネの父親はイギリスから繊維製品を輸入する商人だつた。彼は、イギリスのリヴァプールに拠点を置いて品物を提供してくれていた商人からハリーという名をもらつて長男につけた。これがハリー・ハイネの名の由来だつた。この因縁からして、ハイネがイギリスとその文化に人並み以上の関心あるいは好意をいだいても不思議ではなかつたはずだ。ところが、イギリスで編まれた大百科事典『エンサイクロペディア・ブリタニカ』のハイネの項目に「完璧なイギリス憎悪者 (a full-blown Anglophobe)」という言葉が見られるほどに、ハイネのイギリス嫌いは鳴り響いている。<sup>(1)</sup> 他方、ハイネは、1830年の7月革命に刺激され、その翌年春パリに移住して、1856年2月に死を迎えるまでそこを定住の地とした。そして、彼は「フランス虜員 (frankophil)」というレッテルをしばしば貼られることになつた。この「フランス虜員」という形容は、1830年代のなかばにドイツの政治的状況を批判する言論を活発におこなつた一群の文士を非難する者たちが使つた言葉の一つだつた。<sup>(2)</sup> このような形容が、ナショナリスティックな性質の濃いドイツ文学史の筆者たちによって受け継がれて、いつしかハイネにつきまとう固定観念と化したかのように思われる。特定のイデオロギーに偏することのない中立者の立場からハイネの著述を展望するに際して、「フランス虜員」と同様に「イギリス憎悪」もまた、不幸な固定観念にすぎないのではないかと疑つてみるべきではないかと、との思いを禁じえない。

ハイネがイギリスを嫌悪したと言われる根拠は『イギリス断章』というタイトルで紀行文集『旅の絵』に収められた文章にある。1827年4月中旬から8月中旬までのロンドン滞在がハイネの生涯における唯一のイギリス訪問だったが、その印象を綴つた文章にはたしかに「19世紀の首都」に対する呪詛の言葉が溢れている。工場から吐き出される煤煙と街路に充満す

る騒音に象徴されるように、産業革命がもたらしたものが極端に増幅されてロンドンを覆い尽くしている、とハイネは感じた。『イギリス断章』にしるしたことを、ハイネは別の文書の中でも変奏して書いた。たとえば、ロンドン訪問から8年ほど後に書いたイタリア紀行『フィレンツェの夜』の登場人物であるマクシミリアンに次のように語らせた。「8年前、私はロンドンに行った。……この地で利用されているさまざまな機械の完璧さ、人間の役目を引き受けた多数の機械の完全さ、それが薄気味の悪いものであるようにも思えた。車、軸、気筒、千差万別の小さな鉤と釘と歯車の情熱的に動くさまが私を恐怖で満たした。イギリス人の生活における一定さ、正確さ、精密さ、厳密さが私を少なからず不安にした。なぜなら、イギリスでは機械が人間のように見えるのと比例して、人間が機械のように見えるのだから」<sup>(3)</sup>さらに後、1837年に書いた『ルートヴィヒ・ベルネ。回想記』の中でもロンドン滞在にふれて「悪魔に呪われたイギリス」の「退屈さのあまり息が詰まって死にそうな空気」の充満する状態が典型的にイギリス的なこととしてあげられている。<sup>(4)</sup>イギリス人のピューリタン気質とビジネスマン気質、産業の勃興による大気汚染と騒音、貧富の格差の拡大などについて1827年の滞在の印象にもとづいて折にふれて言及したハイネは、イギリス人たちの使う言葉についてさえ辛辣な皮肉の言を放った。「そこでは1ダースの1音節語を人々が口に入れて、噛んで、砕いて、吐き出す。それを彼らは言語と呼ぶ」<sup>(5)</sup>

そのようなわけで、ハイネを愛好し尊敬もして詩と散文を英語に翻訳したリーランドというアメリカ人は、ハイネのイギリス観が公平さを欠いて誤ったものであることを不満に思い、彼の「偏狭なイギリス人嫌い」を慨嘆した。<sup>(6)</sup>英語によるスタンダードなハイネ伝の筆者として知られるバトラーもまた、こう書いている。「彼は1828年8月8日、ジョージ・カニングの死んだ日にイギリスを去り、完全なイギリス嫌い (a full-blown Anglophobe) となってドイツに帰った」<sup>(7)</sup>前述の『エンサイクロペディア・ブリタニカ』とまったく同じ言い方であるのは偶然の一致と言うよりは、こうした呼び方がイギリスでトポスと化していると見るべきだろう。

バトラーは、ケンブリッジ大学のドイツ文学教授だった人だが、ハイネが恋愛詩と物語詩によって「永続的な評判」を獲得したために、他のジャンルでの作品がイギリスの読者たちの関心を十分に惹くことがなかった、と総括した。そして、ハイネの散文について次のように書いた。「彼は詩集『北海』で詩的な力を発揮したが、それは北海そのもののように嵐で荒れて不安定であり、コンフリクト（葛藤）の中の詩であった。これと同様に彼の散文は、休止する中心点を持たず、筆者の情緒不安定を反映している」<sup>(8)</sup>多分、休止する中心点を持たない、という指摘はもっともたくみにハイネの散文の基本的な性格を言い当てていると思われる。イギリスとイギリス人に関するハイネの印象記もまた、ネガティブな批判ばかりが目立つように見える中で、仔細に見れば絶えず対極に振れていることが読み取れる。初めてテムズ川のほとりに立った時にハイネはイギリスに向かって「自由の国よ」と呼びかけていた。新しい時代の宗教である自由がここにあり、イギリス人が個人的な自由への要求を最大のものとしている、とハイネが思ったのは皮肉でも偽りでもなかっただろう。ただし、個人的な自由の享受の裏側には、法律という形式による搾取があり、それは中世時代さながらの支配関係の状況にとどまっている、とハイネは主張した。矛盾に満ちた印象を総括する論理を見出しかねた末に、政治的な批判を宗教的な批判に変質させようとした。その結果、紀行文集としてまとめられた『旅の絵』では、イギリス旅行の後におこなわれたイタリア滞在からの産物である紀行文が『イギリス断章』よりも前に配置されることになった。<sup>(9)</sup>イギリスで観察し感得したものを十分に整理しきれないうちに、彼のイギリス批判が、個人の自由よりも社会的で普遍的な平等を尊重するフランスを賛美する方向へと論理の道筋をつけていった。

ハイネが心底イギリスとイギリス人を好きになれなかったということが本音であり事実であったとしても、一方的にイギリスを嫌い、対照的にフランスを愛した、と言うのは浅薄な結論の出し方にすぎなからう。1830年代の後半にハイネはフランス人の情熱を欠いた唯物主義を批判していて、その皮肉の鋭さにかけてイギリス批判と本質的な違いはない。休止する中

心点を持たないことこそが、批評家ハイネの真骨頂であったと考えるならば、彼のイギリス批判もまた、たんに産業革命の先進国イギリスへの幻滅の表現と言ってすませられるものではなくなる。批評とは、情緒的な好悪の区別を超えるものであってこそ、説得力を持つのであるし、ましてや、古代ギリシャの喜劇作家アリストパネスの諧謔精神を理想の一つとしていたハイネの場合、言葉の表層の内側に隠された意図と意味を汲み取って味わうことが読者の楽しみとならないはずがない。

すなわち、イギリス批判を個々の独立した言説とだけ見ないで、いっそう大きなコンテキストの中に置いてみるとしよう。当時のドイツでは、反体制的な政治性を持つパンフレットのたぐいの出版が許されなかった。紙数20枚以下の文書は「政治的パンフレット」とみなされて苛烈な審査を受けなくてはならなかった。『旅の絵』の第4集がこの分量に達していなかったため、ハイネは7月革命についての考えを付け加えることにした。ティロルに幽閉されたカール5世と宮廷道化師クントの対話という形で権利と自由の問題について書いた。それは一見すると過去の時代を語る物語らしく見えるが、実はドイツの主権者たるべき者が権利を奪われ自由を喪失していることの不幸をテーマとする、たいそうアクチュアルな意味合いを含むものだった。この延長線上に『イギリス断章』を置いてみるならば、産業革命の行く末を地獄図として描く一方で、個人的自由と法体系の価値付けをドイツの読者に見せていた、と読める。

逆説を文体的なテクニクとして自在に用いたハイネの真意を見抜くのは容易なわざではないのだが、ドイツ文学を歴史的な潮流の中に置いて見直そうとする1980年代の研究の動きから生まれた論文の中に興味深い仮説が見られる。ロルフ・ホスフェルトが『フィレンツェの夜』を分析した書物で、この戯画風のイタリア紀行の構造をグンテの『神曲』に見立てて3つの層に分けて図式化した。

「天国：すべての官能的なものが精神化される（「フローリオの浄化」、  
ロマン主義、ドイツ）

地獄：すべての官能的なものが非精神化され、すべての死せるものが

精神化される（「機械仕掛けの人間」、功利的原理、イギリス）

地上：すべての精神的なものが官能化される（パガニーニの音楽、イタリア）、すべての問題が喜劇にしかない（革命のスフィンクス、フランス）」<sup>(10)</sup>

文章の表層では「天国」と擬せられているドイツは、現実を遊離してすべてを抽象的な哲学かロマン主義に浄化してしまうがために、逆説の次元では地獄にはかならない。地獄と見立てられたイギリスは、天国とされたドイツで求めても得られないものをいちはやく実現したために地獄となった。そうであるならば、イタリアとフランスはどうか？ 現実主義にはまりこんで理想を喪失しているのではないか？ なるほど、イギリスは地獄であるかも知れないが、天国ほど悲惨でありはしない。現実を座標軸として半回転させれば、立ちどころに天国と地獄の位相が逆転するではないか？ いたってアイロニカルな位相の逆転は、反体制的な政治的見解にきびしい目を光らせるドイツの検閲のシステムをあざむく手段であり、文体上の論理ではなかったのか？ 検閲のシステムの網をかいくぐらなければ生計を立てていくことのできない文士ハイネを「ポテンシャルな知識人」、「原生的知識人」と呼んだのは哲学者ユルゲン・ハーバーマスだった。検閲の制約のもとで知識人としての特性を発揮することを拒まれたハイネの置かれた状況をハーバーマスはそう表現した。<sup>(11)</sup>この制約のもとで著述することの困難さを、ハイネはしばしば遠回しの風刺という手段で克服しようとしたし、そこに彼の散文の魅力がある。

この前提のもとで『イギリス断章』からネガティブな印象の上澄みを取り除いてみるならば、当時のイギリス国民の現実感覚と実践的な判断力などポジティブな価値を認識し、ハイネが自分の作家活動の最大の目標としていた「(隷属からの)解放」が、ドイツとは比較にならない程度に達成されていることを承認しないでいられなかったことがわかる。ハイネがロンドンを描写する仕方は、そのまま20世紀末の現代における大都会の様相を、すなわち機能本位で人間性を喪失させる大都会生活を描く方法のモデルとして役立ちそうにさえ思われる。ハイネの発したイギリスに対する呪

咀の言葉は、予想をはるかに超える産業革命の進展への驚きの表現であり、既成の文学的表現では言い表せないほどの「ショック経験」の表現に他ならなかった。<sup>(12)</sup>ハイネその人の言葉からもこれがうかがえる。「ロンドンが、その大きさという点で、私の予想のすべてを凌駕している。私は私自身を見失ってしまった」<sup>(13)</sup>

後年、死の少し前にハイネが次のように語ったと報告されている。「まさか、私がイギリス人たちに反感を抱いて常に悪感情を持って攻撃してきたなどと、私自身は少しも思っていない。かりにそのようなことがあったとしても、ただの気まぐれにすぎなかった。そもそも私はイギリス人を憎悪したためしもない」<sup>(14)</sup>こうしてハイネのイギリスに関する発言は、その成立事情とドイツにおける出版事情および読者の側の期待と受け取り方などの要素を加味してあらためて吟味する必要がある。

イギリスに対する揶揄の口調と対極の関係にあるのがハイネのシェイクスピア観であって、彼の「シェイクスピア狂い (Shakespearomania) とイギリス嫌い (Anglophobia) の奇妙な混合」がかねがねハイネ研究者たちの首をかしげさせてきた。<sup>(15)</sup>これを矛盾をはらんだ二極分裂と見るか、それとも相互に補完しあって有機的なつながりを持つ一つの全体と見るかによって判断が分かれるに違いない。

ハイネのシェイクスピア賛美の唯一の一貫性のある著述『シェイクスピアの女性たち』は、1838年に注文されて書いたものであり、シェイクスピアの戯曲に登場する女性たちに当世流行の衣装をまわさせてイギリスの画家たちが通俗的に美化して描いた絵の集成のための解説文にすぎなかった。良家の子女向きの豪華本であって、それを購入できる人々はハイネの政治風刺を愛読する人々とはおのずと異質だった。ハイネは、この注文仕事を受けるのを躊躇した末に、報酬に魅力を感じて引き受けた。内発的な動機によって積極的に書いた作品とは言いかねるし、45葉のエレガントな女性たちの肖像画こそがその画集の主役であり、ハイネの文章は添え物の域を出なかった。1838年末にパリの書店と提携したライブチヒの書店から売り出された時、検閲に厳しかったザクセンの当局が「ただの1字さえ」



削除を求めなかったし、当時の批評家たちの目にはハイネが政治と「現代の憂鬱な事柄」を論じることから身を引いたと思われた。<sup>(16)</sup> そのように解釈されてしかるべきものであるのならば、ハイネのシェイクスピア好みは検閲を逃れるための非政治的ポーズにしかすぎなかったということになるのだろうか？ この疑問に答えるためにはハイネの文筆活動の出発点に戻ってみる必要がある。ハイネが1856年に生涯の幕を閉じてから後の1870年代、ヴィクトリア朝のイギリスで数多くの詩が英訳されて、ドイツの詩人としてゲーテに並ぶ名声を築いた。その時点でハイネの真価をいち早く認めていたのはジョージ・エリオットであって、評論『ドイツの機知』の中でハイネを「ヨーロッパのユーモアとアイロニーの達人たちの系譜の中で登場した最初のドイツ人」と呼んだ。<sup>(17)</sup> 誠実さと生真面目さを最高の徳目とするヴィクトリア朝時代のイギリスでは、これはかならずしも無条件の賛辞とは言えない性質の評価ではあったが、苦みを帯びた恋愛抒情詩の作者だけではないハイネに光を投げた点でエリオットの炯眼を尊敬しなければならないだろう。法的に離婚を許さないイギリス社会に背を向けてドイツに渡って愛人と同棲生活を始めるとともに、欺瞞にみちた誠実さの徳目を懐疑して社会改良のための行動をころごした評論家マシュー・アーノルドもまた、ハイネの魅力を知るイギリス人だった。<sup>(18)</sup> これら炯眼の持ち主たちにも見えずにいた面をハイネが示していたことに言及したのは20世紀もなかばを過ぎた頃に名著の誉れ高い評論『悲劇の死』を書いたジョージ・スタイナーである。ハイネと同じユダヤ人の血を引くスタイナーは、ハイネのもっとも初期の産物である戯曲に目を向けた。ハイネとシェイクスピアの関係を探るにはハイネ研究者たちにさえ軽んじられてきた2つの戯曲を視野に入れる必要がある。

大学生であった時期にハイネの書いた2つの戯曲が彼の最初の単行本である1823年刊行の『詩集』に続いて、1823年に『悲劇集、抒情的インターメッツォ付き』というタイトルで出版された。2つの戯曲のうちの『アルマンゾル』は、スペインを舞台として、イスラム教徒であるムーア人がキリスト教の勢力拡張に屈していた時代に設定されたい。多くのムーア人

がキリスト教に改宗していて、美女ズライマもその一人である。彼女はドンナ・クララと名をあらためてドン・エリケと結婚の約束をかわしたが、婚約者を愛しているわけではない。改宗させられる以前の恋人であったムーア人アルマンゾルが彼女を連れ出すと、スペイン人である追手の一群に追いつかれる。ズライマを両腕に抱いてアルマンゾルが高い岩から身をおどらせる。もう一つの戯曲『ウィリアム・ラトクリフ』は、前作とは対照的にヨーロッパ北部のスコットランドを舞台とする現代劇として作られた。マック＝グレゴール（英語式の発音ではマグレガー）の娘マリア（メアリ）がダグラスと結婚したばかりのところから始まる。父親が娘とその夫に、彼女がかつてウィリアム・ラトクリフの求婚をしりぞけたこと、彼女の最初と二人目の婚約者が相次いでラトクリフに殺されたことを語る。ダグラスがラトクリフに遭遇して闘って負かすが、以前に自分がラトクリフによって命を救われたことがあったので、殺すことを思いとどまる。負傷したラトクリフがマリアの部屋に入って来る。マリアがラトクリフに愛情を抱いていなかったわけでないことが明らかとなる。ラトクリフがマリアとその父親を殺した後で自殺する。

これらのうち『アルマンゾル』だけが1823年8月にブラウンシュヴァイクの劇場で上演されたが結果ははかばかしくなかった。ずっと後の1849年、ハイネは10歳年下のハインリヒ・ラウベがウィーンのブルク劇場の総監督に就任した時、『ウィリアム・ラトクリフ』の上演の可能性を繰り返し打診した。その思いはかなわなかった。<sup>(19)</sup>この事実は、劇作をとうに断念していたかに見えたハイネが自作の戯曲に愛着と執着を抱きつづけていたことを証明する。そして、ドイツ演劇史の筆者たちからはまったく無視されてきたこれらの習作悲劇を、古代ギリシャ演劇からプレヒトに至るヨーロッパ演劇の巨大な流れの中に位置づけて、作者ハイネの個人的な苦悩と悲哀を表現し、「非個性化を理想とした」古代の悲劇とは逆に「詩人自身の自画像を志向する」典型的にロマン主義的な作品であることを指摘したのが前述のスタイナーだった。<sup>(20)</sup>

これとは異なる視点から、スタイナーと同世代のドイツのユダヤ系評論

家であるハンス・マイヤーが、ドイツ古典主義文学の代表者であるゲーテに対する若きハイネの反抗を象徴する作品として、一般には顧みられることの無いも同然の悲劇の名をあげた。「ハイネはゲーテの文芸とロマン派の文芸の対立を語っているが、それは同時に、文学ひいては芸術全般の機能をめぐる問題におけるゲーテ対ハイネの対照にひとしい。『ゲーテの芸術時代』という言葉で言い表していたものに対して、悲劇『ウィリアム・ラトクリフ』を書いた若き詩人が反抗した。ハイネはゲーテの存在とその作品をはなはだしい政治的・社会的無責任における芸術の完成であると解釈する。ハイネ自身はゲーテの芸術の具象的な表現の力に追いつこうと努力するが、それは、時代のできごと、進歩と反動のあいだの対立抗争にいついかなる場合にも責任を負うことを認識する創造のためである。そうであることによってハイネは、ドイツ・ロマン主義ばかりでなくドイツ古典主義からも身を遠ざけている」<sup>(21)</sup>

スタイナーが「詩人自身の自画像」と呼んだものとマイヤーが言う「進歩と反動のあいだの対立抗争に責任を負うことを認識する創造」とは、一見まったく反対のことを語っているかに思える。しかし、『アルマンゾル』における2つの信仰の葛藤、『ウィリアム・ラトクリフ』における自我の分裂の苦悩というテーマは、ハイネ自身のユダヤ人としての外面的な立場と内面的な苦悩に切り離しがたく結びついていた。「解放」を自分の最大の目標に掲げたハイネにとって、これらのテーマはつねにアクチュアルでありつづけ、政治のレベルで「ブルジョワ解放運動と密接に結びつく」性質を帯びつづけた。とうに戯曲の創作を断念していたはずのハイネが、創作から四半世紀以上も経た時点で『ウィリアム・ラトクリフ』のブルク劇場での上演を望んだのも、これがアクチュアリティを失っていないとハイネが信じればこそだった。それより10年も前の1840年にこの作品のフランス語訳が出版されていた。

これら2つの戯曲とシェイクスピアの関係を粗筋から見てとることはできない。ことに『アルマンゾル』は、少なくとも時間の経過に関するかぎり、三一致の法則に則していたし、『ウィリアム・ラトクリフ』はロマン

主義時代に流行した気味悪い運命劇の亜流にすぎないとする批判を免れるものではない。しかしながら、両者とも幕の区切りを持たず、前者は8つ、後者は4つの、比較的短い場面から構成されている。『アルマンゾル』がブラウンシュヴァイクで「2幕の悲劇」として上演されたが、場面が連鎖する1幕劇としても上演可能な作品である。形態の面では、シェイクスピア戯曲の影響を強く受けた18世紀後半のシュトゥルム・ウント・ドラング期の作品の流れを酌む構造となっている。

ハイネが『アルマンゾル』を書くにあたってボンとゲッティンゲンの大学図書館から資料として借り出した参考資料がハイネ研究者によって明らかにされているが、それによるとスペイン史関係の書籍にまじってシェイクスピアの英語版とフォスの訳によるドイツ語版が含まれていた。<sup>(22)</sup>もっとも重要な外面的な特徴は、シェイクスピアの戯曲の文体として移入されてドイツ戯曲の古典的な文体となるに至ったブランク・ヴァース（5脚弱強格無韻詩行）で書かれていることにある。最初の作品が1766行、第2作がその半分ほどの799行であり、この短さに場面転換の多さを加味すれば、俗にシェイクスピア風と思われていた形式を持つドイツ戯曲の系列に属していることがわかる。

イスラム教とキリスト教の争いとそのはざまに置かれた人間の悲哀と苦悩をテーマとすることからして、『アルマンゾル』はユダヤ人の血筋を引いたがためにユダヤ教とキリスト教の二者択一の岐路に立たされたハイネの心情を投影する作品となった。抑圧されたイスラムのムーア人は抑圧されるユダヤ人の比喻であって、『オセロ』に共通する点がここにある。夜、城中から流れてくる音楽を伴奏にして思いに沈んで独白するアルマンゾルはハムレットを思い起こさせる。最初の場面で独白するアルマンゾルが松明を持って背景を横切る番卒を見て墓場から現れ出た人物に見立てるところにすでに『ハムレット』との類似性が認められる。シェイクスピアの戯曲から得たとおぼしいものが『ウィリアム・ラトクリフ』でいっそう顕著に見てとれる。マリアの乳母は『マクベス』の魔女たちの一人であるかのように、理性を超越した不気味な予言をする。3つの場面に「2つの霧め

いた人影」が物言わずに舞台を横切る。主人公にしか見えない2つの幻影をウィリアム・ラトクリフが「永遠に若く、永遠の春の庭をさまよう魂たち」と呼ぶ(1696-7行)。<sup>(23)</sup>これも『マクベス』におけるダンカンの亡霊のあらわれ方に似ている。

1843年の『アッタ・トル。夏の夜の夢』と1844年の『ドイツ。冬物語』がともにシェイクスピアの喜劇の題名をサブタイトルとしているのは、たんに夏と冬の対照の妙というだけの理由からではなかった。シェイクスピアの『冬物語』は第3幕の後で16年間を一飛びに飛び越え、最後の2幕で一族再会の場面を迎える。ハイネがパリに移住してから再びハンブルクにおもむくまでに12年の歳月が、このサブタイトルに反映されている。『アッタ・トル』は、1843年始めに新聞に連載された時点ではまだサブタイトルを持たなかったが、1847年に一冊の書物にまとめられた時に、『冬物語』との関連で副題を添えられた。人間に捕まって踊る獣として見せ物にされていた熊が鎖を断ち切って故郷の山地の洞穴に帰り、人間社会の身分の不平等や貧富の格差、独占支配と私有財産などをはげしく攻撃しながら動物共和国の樹立のための革命を動物たちに呼びかけるのだが、結局は人間に射殺され、皮をはがれる。自由解放は一夜の夢にすぎなかった。シェイクスピア喜劇の題名を借りてはいても、ハッピーエンドを持つことができない。ハイネがこの逆説的な叙事詩の中で、日頃からジュリエットと愛称していた妻マティルドがバルコニーにいるさまを描いているのは、明らかに『ロミオとジュリエット』第2幕の情景を気取ったのである。さらに『アッタ・トル』第18章ではシェイクスピアを亡霊の群の中に出現させて、ピューリタンに非難されて罪人扱いされた劇作家への同情の念をさえ示している。

ハイネの作品を時間軸にそって配置すれば、1820年代前半の2つの悲劇と1840年代に完成された『アッタ・トル』と『ドイツ』にはさまれる位置に『シェイクスピアの女性たち』が来る。先述したように画集の解説として書かれたものであったために、描かれている女性たちの性格や戯曲の中での役割を語ることに紙面の大半が割かれているのであり、系統立った

シェイクスピア論を期待するわけにはいかない。しかし、体制批判や政治風刺から離れてのびのびと思いのままを書いているところに魅力がある。

「私はシェイクスピアと快く交際することができない。私は彼の足元にもおよばないと痛感するばかりだ。彼は私にとって全能の大臣で、私はたんなる廷臣にすぎなくて、いつ何時でも彼に罷免されるかも知れない、と思っている」<sup>(24)</sup>ハイネがこう書いたのは1824年のことだったのだが、シェイクスピアに頭が上がりないという思いが『シェイクスピアの女性たち』では、シェイクスピアをキリストになぞらえて、生地ストラトフォードを「北方のベツレヘム」とたとえるところに言い表されている。イェルサレムとアテナイ、聖墓と芸術、「精神の中の生活と生活の中の精神」といった対照を設定して、シェイクスピアがこれらの対立する二つの原則を超越して結合した、とハイネは言う。さらに彼はシェイクスピアを「精神の太陽」とさえ呼ぶ。<sup>(25)</sup>

「シェイクスピアはユダヤ人であるとともにギリシャ人である」という文が『ルートヴィヒ・ベルネ』の中に見られる。<sup>(26)</sup>それより先、ハイネは「懐かしのウィリアム (le doux William)」を「偉大な、もちろん到達しようのない手本」と言っていた。<sup>(27)</sup>

今日『シェイクスピアの女性たち』がシェイクスピア研究に寄与するに足る著作であるか否かについてハイネ研究者たちの間で見解が分かれているけれども、厳密なテキスト分析にもとづいていないエッセイの域を高く超えるものでないことは明らかだ。<sup>(28)</sup>だが、学術的研究の厳密さをハイネから期待するのは筋違いと言わなくてはなるまい。イギリスの学者が評した通り、「シェイクスピアについてのハイネのコメントは、シェイクスピアによりもハイネにいつそう多くの光を投げる」<sup>(29)</sup>

デュッセルドルフの商業学校で第4外国語として英語を学んだだけのハイネに精緻なシェイクスピア研究を期待するべきではあるまいし、パリでシェイクスピア論を執筆するにあたって彼が拠り所にしたのは英語の原典ではなく、シュレーゲル＝ティーク訳のドイツ語版のシェイクスピア全集だった。しかし、ハイネのシェイクスピア戯曲との関係は、2つの悲劇の

成立の背景をなしていたばかりでない。彼は1820年前後のベルリンで名優ルートヴィヒ・デフリアン演じる舞台を見ていたし、1827年のロンドン滞在中にドゥルーリー・レーン劇場でエドモンド・キーンがオセロ、シャイロック、リチャード三世等に扮するさまを見ていた。ロンドンでハイネがもっとも親しみを持って交際できたのは、当代のイギリス人たちではなく、シェイクスピアの舞台の世界だった。もとより、ハイネは、シェイクスピアをアカデミックな考察の対象にする意図のあろうはずもなく、『シェイクスピアの女性たち』の書き出しの文章からして、彼独自の思いを反映していた。「私の知っている一人の善良なハンブルクのキリスト教徒が、われわれの主で救世主でもあるお方がユダヤ人として生まれたことを不満に思っていた。完全性の手本として最高の崇拜を受けるに足る男が、不細工な長鼻の種族に属していたことを認めなければならないたびに、深い不快感が彼を襲った」

このキリスト教徒のように、自分もまた、シェイクスピアがイギリス人であって「神が怒りの中で創造した不愉快な民」に属していることを喜べない、とハイネは書いた。例のイギリス嫌いの弁がここでも顔を出す。グロテスクな誇張と様式化を用いて、ハイネはイギリスを俗物性の象徴として擬人化する。そうであるならば、シェイクスピアを語る機会を利用して、ハイネは『イギリス断章』の変奏をこころみたのか？ ハイネはシェイクスピアの生きた「メリー・イングランド」の時代に思いをはせて、こう書いている。「あの頃のイギリスは今日のイギリスとたいそう違っていた。それはメリー・イングランドとも呼ばれて、色彩の輝き、意味深長な道化ぶり、沸き立つ行動意欲、溢れんばかりの情熱が咲き誇っていた。……濃いビールの代わりに軽佻なワインとデモクラティックな飲料が好まれていた」<sup>(30)</sup>この好ましい、生気に満ちた時代をハイネは一つの黄金時代と見た。シェイクスピアに才能を発揮させたエリザベス朝時代を、古代ギリシャの民主主義時代に匹敵する理想的な時代と見立てた。この幸福な時代を失わせたのがピューリタニズムであって、演劇を始めとして諸芸術を軽蔑し排除した清教徒が今日のイギリスの様相を招いた、というのが

ハイネの歴史認識の仕方だった。ここにおいて、ハイネのイギリス嫌いなものが、たんなる生理的な好悪のレベルでの現象ではなく、彼一流のロジックの産物であったことが推理できる。

ハイネは世界の事象を語る際に演劇のメタファーを多用した。たとえば『フィレンツェの夜』では、フランス人たちが7月革命を上演し、全世界が観客となってこれに拍手喝采した、という意味のことを書いていた。そのハイネがロンドンでの観劇体験にもとづいて喜劇『ヴェニス商人』を悲劇に分類していることに注意しておこう。ユダヤの商人シェイロックが不当に辱められるさまを見た女性が発した同情の言葉にことよせて、ハイネは喜劇の皮をかぶった悲劇を見て取っていた。1837年に刊行されたセルバンテスの『ドン・キホーテ』のドイツ語訳の序文としてハイネの書いた文章の中で、『トロイラスとクレシダ』がシェイクスピアのもっとも特異な作品として名をあげられているのは、この作品において喜劇と悲劇が混ざり合っているという理由による。アイロニーがたんに文体という意味でのスタイルにとどまらず、世界そのものがアイロニーである、と見たハイネにとって、シェイクスピアは喜劇と悲劇の間のアイロニカルな関係を熟知した作家に思われていたに相違ない。

このアイロニカルな様相を呈する舞台としての世界で、シェイクスピアの世界観的中立の立場を、ハイネはさぞかし羨望していたに相違ない。ハイネは『ドン・キホーテ』の序文で当時のラディカルな共和主義者たちが文学と政治を安直に結び付ける考え方を批判して、身分階級の平等を説く彼らが人間の精神的な区別をも抹殺しようとする傾向を非難した。そしてハイネがドイツをテーマとして書こうとしていたものの中に次のような文章がある。「デモクラシーにおける文学の終末。スタイルの自由と平等。誰もが自由に思いのままに書くことを許され、どう下手に書こうとかわまらないのであれば、スタイルにおいて他人を凌駕して書くことが許されなくなる」

この、生前に活字にされることなしに終わった文章と並んで、次のような覚え書きが残されている。「ギリシャ人における生活と文学の同一性



——生活がしばしば文学の反対物を形成するわれわれの国ほどの、偉大な詩人をついぞ持たなかった。シェイクスピアの偉大な足指はすべてのギリシャ詩人を合わせたよりも多くを含んでいる（アリストパネスは例外）。ギリシャ人は偉大な芸術家を持ったが、偉大な詩人を持たなかった。詩心よりも芸術感覚を多く持っていた——彫刻を。なぜなら、現実そのものが具体化された文学にはかならず、最上のモデルを多く提供したから、それをコピーするだけなんですのである」<sup>(31)</sup>

「痛烈なイギリス批判を連ねた『イギリス断章』においてさえ、ハイネはシェイクスピアを「この偉大なブリテン人」と呼んでいた。「詩人であると同時に歴史家」であって「文学と歴史のあいだの区別を知らなかった最初期の歴史記述家たちに似ている」<sup>(32)</sup>晩年、1855年にハイネがエリーゼ・クリニッツという名の女性に次のように語った、と伝えられている。「たとえ神が神自身を最初の創造物と呼びたがろうとも、その次に控えるのがシェイクスピアです」<sup>(33)</sup>ハイネにとっての神がキリスト教の神であるのかどうかという問題も含めて、含蓄に富むこの言葉の意味合いを検証してみることは無駄なところみとはなるまいと思われる。エリザベス朝時代のイギリスと19世紀のイギリスの関係について語るハイネの言葉と論理は、ドイツとフランスについて語るハイネの文章の真意を探るためのヒントを提供するに相違ないとの思いをますますつのらせる。

#### 注

- (1) Encyclopaedia Britannica, vol. 11, Chicago, London etc. 1962 p.389.
- (2) Vgl. Hans J. Schütz: Verbotene Bücher. Eine Geschichte der Zensur von Homer bis Henry Miller. München 1990. S.123f.
- (3) Heine: Sämtliche Schriften. München 1968, 1. Bd., S.588f.
- (4) A.a.O., 4. Bd., S.36.
- (5) A.a.O., 1. Bd., S.586.
- (6) Heine: Works, translated by Charles Godfrey Leland. London 1891-1905, vol. 1, p.245.
- (7) E. M. Butler: Heinrich Heine. A Biography. London 1956, p.91.
- (8) A.a.O., p.92.
- (9) Vgl. Klaus Pabel: Heines "Reisebilder". München 1977. S.231ff.
- (10) Rolf Hosfeld: Nachtgedanken. Heinrich Heines "Florentinische

- Nächte". In: Heinrich Heine und das neunzehnte Jahrhundert : SIGNATUREN. Hrsg. von Rolf Hosfeld. West-Berlin 1986, S.86.
- (11) Jürgen Habermas: Heinrich Heine und die Rolle des Intellektuellen in Deutschland. In: Merkur Nr.448, 6/1986, S.453-468.
  - (12) Vgl. Ralf Schnell: Heinrich Heine. Hamburg 1996. S.105f.
  - (13) Heine: Sämtliche Schriften, a.a.O., 1. Bd., S.308.
  - (14) Heine zu Lady Duff-Gordon kurz vor seinem Tode. HSA XX, S.284 f.
  - (15) Karl Josef Holtgen: Über "Shakespeares Mädchen und Frauen". In: Heine-Studien. Hrsg. von Manfred Windfuhr. 1973. S.469.
  - (16) Blätter für litterarische Unterhaltung, Nr. 361 vom 27. Dezember 1838, zitiert in: Heine, Sämtliche Schriften, 5. Bd., S.369.
  - (17) Vgl. George Eliot: German Wit: Heinrich Heine. In: Works. Edingburgh n.d., vol 21.
  - (18) Vgl. Matthew Arnold: Heine's Grave. In: Poetical Works. London 1890.
  - (19) Vgl. Heine: Historisch-kritische Gesamtausgabe der Werke. 5. Bd. Hamburg 1994. S.470.
  - (20) George Steiner: The Death of Tragedy. London 1861. p.139f.
  - (21) Hans Mayer: Deutsche Literaturkritik im 19. Jahrhundert. Von Heine bis Mehring. Frankfurt am Main 1976. S.31.
  - (22) Vgl. Kanowsky, Heine-Jahrbuch 1973. S.132f./DHA (Düsseldorfer Heine-Ausgabe) 5. Bd. 1994, S.383.
  - (23) Heine: Historisch-kritische Gesamtausgabe der Werke. 5.Bd. Hamburg 1995. S.65.
  - (24) Norbert Altenhofer (Hrsg.): Heinrich Heine (Dichter über ihre Dichtungen Bd. 8.). München 1971. S.192.
  - (25) Heine: a.a.O., 4. Bd., S.174.
  - (26) Heine: Ludwig Börne. Eine Denkschrift. B IV. S.47.
  - (27) Heine: Lesart zur Romantischen Schule. B III, S.878 und: Zur Literatur 1820-28, B I, S.414.
  - (28) Walter Wadepuhl, "Shakespeares Mädchen und Frauen". Heine und Shakespeare. —In: Heine-Studien, Weimar 1956, S.129-132.
  - (29) L. M. Price: English Literature in Germany, Burkeley 1953, p.282.
  - (30) Heine: a.a.O., 5. Bd., S.372.
  - (31) Heine: Notizen zum Deutschland-Thema (1844). In: DHA 2.Bd., S. 299.
  - (32) Heine: a.a.O., 4. Bd., S.178f.

- (33) Siegbert Prawer : Heine's Shakespeare— A Study in Contexts.  
Oxford 1970, p.9.